

素晴らしき夏休み

校長 矢野 毅 吉

夏休みと言えば様々なことを思い出す。小学生の頃は父親の実家、熊本で過ごした。雄大な阿蘇の風景と清流白川。昼はトラックの荷台に乗って田畑へ向かい、夕方には祖母と牛の世話をした。母親の実家、屋久島ではこちらより、一回り大きい虫（嬉しいのと嬉しくないのがいた）や蛇が怖かったこと。前に伸ばした自分の手先が見えないくらいの暗さや、毎日のようにゲリラ豪雨を経験した。

家族でプールに行ったが、行ってからその日が登校日だったことに気づき、親父に怒鳴られて、しょうもない行事になってしまったことも、今は笑い話だ。

中学生になるとクラブがしんどかった。友達と過ごす時間が増えて、田舎にも帰らなくなった。3年生の時、友人2人と釣竿とテントを積んで、自転車で淡路島一周に出かけた。魚は釣れなかったが、飯盒でご飯が上手に炊けたことが嬉しかった。この時の経験から、以後大学を卒業するまで、自転車で日本各地を走るようになった。

高校はひたすらクラブ。血尿がしょっちゅう出た。大学はクラブとアルバイト。とにかく金を貯めないとやっていけなかったから必死だった。実家に帰ってきている間は4年間、西明石の公設市場で魚の卸売りのアルバイトをした。朝4時からの時給は当時破格で、仕事も自分の性分に合っていた。卒業するときに就職を勧められ、迷った経験がある。

教員になった頃はクラブばかりしていた。しばらくしてこれだけではいけない、せっかくの時間にもっと社会科教員として見聞を広げようと、青春18きっぷで東北一周の旅に出た。秋田竿灯祭り、青森ねぶた祭、仙台七夕祭りを見て回り、旅先で知り合った人の家に泊めてもらい、出会った人との年賀状のやりとりも続いている。仙台で入った寿司屋の店主が元甲子園球児で、野球の話に花が咲き、湯呑みももらった。

家族を引き連れて自分が印象に残ったところを再訪し、時にはすねるように1人でウロウロし、いつのまにか47都道府県を制覇していた。

夏休みという“時間”がどれほど今の自分をつくってくれたことだろう。その時、何の意味も感じなかった小さな出来事がふと蘇り、ちょっとやってみようかなとなる。あっ、あの日見たことがあるぞ、というものが大人になった自分の好奇心をぐっと引き立たせる。夏休みという時間は大変貴重で、キラキラ輝いていた時間であった。そしてその輝きはやっぱり子どもの時の方が眩しかった気がする。『夏休み』という日常からかけ離れた膨大な時間。心底、「よかったな」と思うのだ。

単に「休み」と考えると多少短くなってもいいのかもしれない。でも貴重な、生きるための学習の時間であったと考えるなら、少し短くなったのは残念な気がする。

最後に言わせてもらえば、私は休み前、いつも決心するものの、結局小学校から高校まで、余裕をもって宿題を終えるということが一度もできなかった。終わり1週間ぐらいは宿題が終わった夢を何度も見て、泣きそうになった。その嫌な思い出も脳裏に焼き付いていて、この文章も締め切りの10日前に提出した。



皆さんもせっかくの時間。安全に注意し、有意義に使ってもらいたい。